

ベネズエラ・カラカス日本人学校での3年間

前 カラカス日本人学校 校長

現 弟子屈町立美留和小学校 校長 榊 勉

1 はじめに

私は平成元年から3年間、赤道直下の国であるエクアドルのキト日本人学校（現在は日本語補習校）に派遣された。南米に縁があり、今回約20年振りに同じ南米の国であるベネズエラのカラカス日本人学校に3年間派遣され、前回、教諭としての派遣時には経験できなかったこともたくさん経験することができた。任期中に知り得たことや経験したことのほんの一部となるが、ベネズエラや首都カラカスの概要、カラカス日本人学校の概要と特色ある教育活動、カラカスの治安と生活について報告する。

2 ベネズエラ、首都カラカスの概要

(1) ベネズエラの概要

① 正式国名

ベネズエラ ・ ボリバル共和国

(Republica Bolivariana de Venezuela)

② 位 置

北部はカリブ海に面し、東部はガイアナ、南部はブラジル、西部はコロンビアと国境を接する。

北緯0～12度、西経59～73度に囲まれた範囲に位置する。

③ 人 口 2883万人 (2012年)

④ 面 積 912,000 km² (日本の約2.4倍)

⑤ 首 都 カラカス首都区

⑥ 言 語 スペイン語

⑦ 人種構成

混血66%、白人22%、黒人10%、原住民2%

⑧ 独 立 1811年7月5日

⑨ 政治体制 立憲共和制

⑩ 元 首 ニコラス・マドゥーロ大統領

⑪ 宗 教 主としてカトリック教

⑫ 通 貨

単位「ボリーバル (Bs. F.)」 1US\$ = Bs. F. 6.3の固定レート (2012年2月12日より)

⑬ 時 差 マイナス13時間30分

※日本：12月31日午後9時 → ベネズエラ：12月31日午前7時30分



(2) 首都カラカスの概要

① 位 置

首都カラカスは、カリブ海から直線距離で約15kmの所にあり、ベネズエラ北部の東西ほぼ中央部に位置。

② 名前の由来

カラカスの名称は、カラカス盆地の原住民であるカラカス族に由来。

③ 地 形

首都は、ラ・コスタ山脈の900～1,000mの高所にあり、東西約20km、南北約5kmの盆地の中に位置している。首都とカリブ海の間には、アビラ山がそびえている。



④ 気 候

一般に雨季(4～10月)と乾季(11～3月)に分かれる。年間平均気温は20～25℃で、湿度が低いので年間を通して過ごしやすい

⑤ 治 安

多くの問題を抱えており、政情は不安定。1999年2月にウーゴ・チャベス政権が誕生したが、治安の変化もなく、窃盗、強盗、殺人事件、交通事故などは頻繁に起きている。銃による事件も多い。

日本人の住む住居の外壁には電流が流れ、二重三重の施錠がなされている。

現在、外務省からはカラカス首都区に注意喚起が発令されており、「渡航の是非を検討してください」という勧告がされている。

⑥ 医 療

医療設備は整っており、24時間体制の緊急総合病院が日本人居住区近くにある。医薬分業で、薬は医師から処方箋を受け取って、近くの薬局で買う仕組みである。

⑦ 交 通

首都カラカスには、地下鉄が4路線運行するなど、中南米の国々の中では交通網が発達していると言える。自動車の台数は非常に多く、縦横に高速道路(アウトピスタ)が整備されているが、慢性的な渋滞となる。バスやタクシー、乗合バスもあるが、治安上、日本人の多くは、基本的に自家用車を利用している。

⑧ 住 宅

カラカスには、キンタと言われる庭付きの広い一軒家、高層マンション、ランチョと言われるブロックを積み上げた小さな家の3種類の住宅があるが、日本人駐在員は現在、警備員付きの高層マンションに住んでいる。

⑨ 物 価

インフレが年々進んでおり、物価が高騰している。物価上昇率は政府発表でも毎年30%程度。2013年は56.2%という驚異的なものであった。消費税は12%。ただし、生活必需品は無税である。

⑩ 通 信

郵便事情は悪く、手紙は航空便で約2週間かかる。また、小包などは、途中で開封され、紛失(盗難)にあう場合もある。料金は割高だが、民間宅配業者を使えば、ほぼ確実に荷物の受け取りができる。携帯電話はほとんどの人が持っており、無料のwifiは日本よりも普及している。

3 カラカス日本人学校について

(1) カラカス日本人学校の概要

① 位 置 日本人の居住区から約20km、アティージェョ市の住宅街にある。

② 創 立 昭和50年(1975年)11月1日。来年度40周年を迎える。

- ③ 設置者 二水会（日本企業団体）
- ④ 運営主体 カラカス日本人学校理事会
- ⑤ 児童生徒

進出企業、大使館、日本人学校等の子女を中心に、私の派遣期間は5～10名程度在籍。

- ⑥ 教員等

派遣教員は校長を含め5名。現地採用の日本人教員1名とベネズエラ人の語学講師1名。事務2名、運転手1名、警備員3名、管理人1名。



(2) カラカス日本人学校の特色ある教育活動

カラカス日本人学校の特色ある教育活動として、在籍する児童生徒と教員に受け継がれているカラカス太鼓や現地のマリア校との交流、総勢300名以上が参加する運動会、治安の悪い中でも実施してきた社会見学、アビラ山登山、小学部5年生以上が参加し、毎年実施される修学旅行、緊迫感のある避難訓練やスクールバスの運行、治安悪化で帰宅できなくなる場合にも備えた宿泊学習、PTAが中心となって実施した餅つき大会やこども祭り等があげられるが、このうちいくつかについて説明する。

① 近隣の現地校であるマリア校との交流

カラカス日本人学校から車を使って10分程度で行き来できる私立校のマリア・アウキシリアドーラ校（以後マリア校）とは、平成17年度から毎年、交流を行っている。それまではマリア校よりもカラカス日本人学校に近い公立の小学校と交流をしていたが、交流のたびにカラカス日本人学校児童生徒に対する侮辱的な言葉が相手校の児童から出てきたり、カラカス日本人学校児童生徒のスペイン語が不十分なことを馬鹿にする態度が顕著で、交流により得られるものよりも失うものの方が多いと判断し、マリア校との交流に変更したようである。

マリア校は、カラカス日本人学校の事務職員や管理人の子どもが通っているカトリック系の小中併置の私立校である。校舎は各クラスの他に図工室、音楽室、体育館、多目的ルームなどもある。自前のスクールバスはなく、市の所有するスクールバスを活用している。先生方は親日的で児童生徒も日本人学校や日本に対して理解がある。マリア校との交流は、はじめのうちは、カラカス日本人学校も会場として交流していた記録があったが、ここ何年かはマリア校のみを会場とした交流となっていた。

23年度のマリア校との交流学习は、次の3つのねらいのもと、それまで同様にマリア校を会場に実施した。①現地の小中学校を訪問し、児童生徒と交流することを通して、ベネズエラをより深く知り、理解する。②現地校の学習に参加することで、文化や習慣、教育の違いを肌で感じながら、国際感覚をさらに磨く。③毎週行っているスペイン語学習の成果を確かめ、今後のスペイン語学習への意欲づけとする。

このときの交流内容は、まずカラカス日本人学校児童生徒が、マリア校の該当学年のクラスに入って一緒に授業に参加し、その後、全体交流としてカラカス日本人学校から和太鼓の演奏、マリア校から各学年毎に踊りなどの文化的な内容の発表だった。この年の交流はそれまでの交流と同じことをこなすだけで精一杯だったように思う。

24年度の交流学习もマリア校を会場に行われた。この年は派遣教員5名の内、私以外の4名が入り替わったため、交流学习についても新しく派遣された教員が担当した。担当者はよく私の意を汲んで真摯な態度で交流の企画・立案、実施に奔走した。形の上ではそれまでの交流と同じようにも感じられるが、

カラカス日本人学校の児童生徒が参加する教科を十分に考えるなど、担当者の「交流で子どもたちを育てたい」という気持ちが大きく表れたものだった。マリア校との念入りな打合せや、通訳であるカラカス日本人学校事務長との念入りな確認など、この交流を実のあるものにしたという情熱が伝わってきていた。何にもまして、子どもたち一人一人にとって充実し、やってよかったという交流になった。この年の交流の成功が、25年度の交流機会の拡大につながったと思う。

25年度の交流は24年度の交流の成果と反省を生かし、交流を年に一度ではなく、複数回行った。1回目の交流は、「現地校の小中学生との交流を通して、自分から積極的にベネズエラ人と関わろうとする。」と「今後さらに、ベネズエラ人と交流を深めようとする態度を育てる。」の二つのねらいのもとに、運動会前の6月にマリア校の児童生徒の一部26名を招いてカラカス日本人学校で実施した。現在の派遣教員にとっても初めてのカラカス日本人学校での交流学习であった。前半は小2・3年生がおにごっこと長縄跳び、4・6年生がTボール、中2がバスケットボールで交流した。後半は全員が紅白に分かれて、ベネズエラ人・日本人混合チームで運動会に実施する紅白玉入れと綱引きを行って交流した。昼食は保護者が作ってくれたカレーライスと一緒に食べながら、楽しく交流した。このスポーツ交流の後に実施したカラカス日本人学校の運動会にはマリア校の児童生徒がたくさん参加した。



この年2回目の交流は学習発表会前の10月に行った文化交流である。これもカラカス日本人学校で実施し、前半はマリア校の児童生徒に書道の体験をしてもらった。体育館に全員が集まり、学年毎に「友だち」「心」「星」「楽」「夢」の字を日本人学校の児童生徒が優しく教えながら交流した。後半はカラカス日本人学校の和太鼓の演奏の後、マリア校の児童生徒に和太鼓の体験をしてもらった。



この年3回目の交流は2月にマリア校を会場に予定していたが、残念ながら、カラカスの治安悪化に伴いカラカス日本人学校、マリア校ともに正常な授業ができなくなったため中止となった。マリア校の教員と日本人学校の教員との交流計画も立てていたが、日程調整がうまくいかず、実施できなかった。

私のカラカス日本人学校在籍3年間のマリア校との交流学习の実際は、以上の通りである。年度末に実施した学校経営に関する保護者アンケートでも、保護者の方から、マリア校との交流が進んだことに大変良い評価をいただいた。私の派遣期間中に教職員同士の交流ができなかったことがとても残念だが、少なくとも、「現地校との交流」から、「マリア校との交流」に変わった3年間だったと思う。

② スクールバスの安全運行とスクールバス避難訓練

カラカス日本人学校の児童生徒は、全員がスクールバスで通学している。日本人学校はスクールバスを2台所有しており、私の派遣3年目の途中までは運転手2人で2台運行をしていた。しかし、児童生徒5名の学校で運転手2名を雇用し続けることの是非を検討していた矢先に、1名の運転手が依願退職をし、1名の運転手が2台のスクールバスを交互に使いながら運行することとなった。幸い学校の管理人を兼ねた

校務補さんがスクールバスの運転もできるため、緊急時や運転手が休暇を取ったときなどに対応できる体制もとることができた。

カラカス日本人学校では児童生徒の登下校時のスクールバス運行はPTA組織の一つである「スクールバス運行委員会」が行っている。運行委員会のメンバーは運行委員長（保護者から選出し、学校理事会の理事を兼ねる）と、副委員長（保護者）、学校のバス担当教員2名（主担当と副担当）の4名で構成されている。スクールバス運行は運行委員会が責任を持つことになっているが、運行表の作成や毎日の運転手とのやり取りはバス担当教員が行っている。

登校時、スクールバスが最初の家庭に迎えに行くのは、ほぼ7:00である。運転手と警備員が、スクールバスの出発点である駐車場に到着しているかどうかの無線連絡が入るのは6:30である。バス担当教員はそれ以前に、欠席する児童生徒の連絡を保護者から受けていて、無線連絡の時にその情報を運転手に伝えている。この無線による運転手と担当教員のやりとりは、他の派遣教員もそれぞれの携帯無線機で聞き、情報を共有しており、電波状況や会話力により連絡がうまくいかない時はいつでも他の教員が助けることができるようにしている。

派遣教員はスクールバスよりも早く、居住区から学校に向かい、交通事故や事件により通行止めや大渋滞になっている場合には、持参している無線機で連絡することになっている。

下校時、運転手は保護者に児童生徒を引き渡す都度、学校に無線連絡を入れている。この無線を受けるのもバス担当教員である。道路状況等により家庭への到着が20分以上遅れる場合は、事前に学校から家庭に連絡を入れている。平成24年度はバス担当教員のスペイン語による無線連絡を、着任したばかりの派遣教員が行った。スペイン語の全く話せなかった派遣教員ではあったが、この担当を通じて会話力を身につけていった。ただ、通常、スクールバス担当教員の任期は10月～9月であるが、この年のように4月から担当した場合の任期をどうするかの前例はなかったが、赴任間もなくの担当であり、スペインでの対応による毎朝の緊迫感は相当であったと判断し、10月から主担当と副担当を交代することにした。

また、以前は警備員がスクールバスの添乗に間に合わない場合、教員が代わりに乗車するようになっていたが、バス運行委員会で協議し、警備員が一人も乗車しない場合は運行しない旨の決定をし、教員の朝の動きがはっきりし、安心して学校に向かえるようになった。

更なるスクールバスの安全運行を期して、平成25年度よりスクールバスにGPSを搭載し、教員はもとより、保護者にもパスワードを公開し、インターネットを利用してスクールバスの位置が確認できるようになった。

また、カラカス日本人学校ではスクールバスでの登下校時の安全を確保するために、緊急事態を想定した避難訓練を実施している。大使館の安全担当領事の協力を願い、児童生徒、教員、事務長、運転手、警備員、管理人、大使館警備担当領事と大使館スタッフが参加して実施している。

避難訓練は、以下の3つの想定で行われる。

- ・ 登校中にバスが交通事故のため運転不能になり、運転手が無線を使い、現在地や様子を伝える。その後、乗車している児童生徒が無線で詳しい状況を学校に伝える。次に、救援に向かったバスに速やかに乗り換える。
- ・ 登校中にバスがデモなどのため走行不能となり、そのデモ隊から投石などを受ける。運転手が無線を使い、現在地や様子を伝える。その後、乗車している児童生徒が無線で詳しい状況を学校に伝える。状況が沈静化するのを待ち、出発する。
- ・ 登下校中にバスが強奪され、全員が連れ去られる。しばらく走った後に、児童生徒のみ降ろされる。児童生徒が学校へ連絡して救助を要請し、安全な場所で待機。救援バスが迎えに行く。

この避難訓練を実施するにあたり、事前に児童生徒に対しては、事故やデモの時のバス内での行動と無線機の使い方をスクールバス担当教師から指導し、運転手、警備員には前週の木曜日の従業員打ち合わせの場で、訓練の具体的な内容とそれぞれの動きを校長とスクールバス担当教師から説明している。



毎年、避難訓練には児童生徒も大人も全員が真剣に参加していた。実際にスクールバスを揺らされる場面では、低学年の児童の中には泣き出しそうな者もいた。

万が一、このような状況が起きた場合も冷静に対応し、しっかりと児童生徒の安全確保を行うであろうと思われた。

③ 参加者300名を超える運動会

運動会実施時のカラカス日本人学校の在籍児童生徒数は10名前後であったが、運動会には毎年300名を超える参加者があった。この半数以上は日本企業従業員や大学生、日本語を学習中で日本に興味を持っている方等のベネズエラ人で、運動会では彼らの優しさや陽気さを身近に感じることができる。ベネズエラ人が参加する競技としては、徒競走・かけっこ、玉入れ、一般綱引き、パン食い競争、大玉を頭の上でリレーする地球おくり、大玉転がし、チャンス走、一般リレー等があり、ベネズエラ人と児童生徒をはじめとする日本人と一緒に出場する。開会式で行うラジオ体操はベネズエラ人にとってはなかなか難しいものであるが、一緒に楽しみながら行っている。



また、開会式や閉会式での大会長（校長）や来賓の挨拶はもちろん、児童生徒の言葉も日本語だけでなく全員がスペイン語を交えて行っている。

そして、参加者全員が紅組、白組に分かれて行う応援合戦は児童生徒が参加者をリードし、盛り上げる。この運動会を通じて児童生徒は、人種が違って仲良くなれることや一緒に活動できることを体感する。また、参加者の前で堂々とスペイン語で挨拶したり、スペイン語で応援合戦のリードをしたりして、邦人の大人だけでなく、ベネズエラ人の大学生や大人達とも堂々と交流を深め、国際性を身につけると共に自信を持つことにつながったと思われる。



特に私以外の派遣教員が入れ替わった平成24年度は、年度が始まって2ヶ月しか経たない時期に運動会を実施するのは厳しいかもしれないとの心配もあったが、新しく派遣された教員の努力で、保護者から「経験者がほとんどいないにもかかわらず、とてもスムーズに運営されていた」という声をいただくなど、素晴らしい運動会となった。教師一人ひとりの力量とチームワークの良さが光った運動会だった。平成25年度の運動会は児童生徒、教職員の構成が変わらなかったこともあり、カラカス太鼓（和太鼓）の披露も行うことができた。

④ 視野を広げる修学旅行

カラカス日本人学校の修学旅行は以下の5つの目的で、実施される。①ベネズエラで活躍する日本人関係者を訪ね、国際理解に対する積極性を養う。②興味関心を持って諸施設を見学し、見聞を広める。③安全で的確な行動ができる力を育てる。④自然の素晴らしさを体験する。⑤団体行動、グループ行動を通じて、社会性・公共心・責任感を養う。

この目的のもと、平成23年度は進出企業であるトヨタ自動車の全面的なバックアップを受け、トヨタの工場のあるクマナ、観光地として有名なマルガリータ島を主な旅行先として実施した。下見では飛行機やフェリーの時間も正確であったが、実際の修学旅行では、飛行機の長時間の遅れやフェリーの突然の欠航など、ハプニング続きであった。フェリーが欠航したときに、トヨタの工場長さんがホテルを提供して下さり、児童生徒が暑さと過労で倒れないように配慮して下さったことを昨日のように思い出す。

24年度は前年度の反省を受け、前年度以上にいろいろな場面で、裏番組などの緊急時の対応をあらかじめ考えて旅行に臨んだ。日本企業である日立が大きくかかわっているグリダムの見学やデルタデオリノコでのボートツアー（川イルカとの遭遇やピラニア釣り体験）、製鉄の国営企業であるシドールの見学など、子ども達にとっては興味深い体験となった。この年は4月に派遣されたばかりの教員が修学旅行を担当し、無事に（中南米ではこのことがとても重要）しかも子ども達にたくさんの感動を与えた修学旅行となった。これは、派遣教員の努力は勿論、現場を良く知っている方を紹介してくれたり、ボランティアで案内をしてくれたりした、たくさんの日本人関係者の親身な協力があったからである。治安の悪い当地で修学旅行はもとより、各種学習活動を行う場合に、当地在住の方々の協力が必須である。そのためにも、校長はじめ派遣教員は現地の日本人社会との良好な関係を普段から築いておくことが大切である。この年、「とても安心感のある修学旅行だった」との声を保護者からいただいた。



25年度は治安の悪化に伴い、国内での実施が不可能になったため、目的を若干変え、国外であるパナマを目的地とした修学旅行を実施した。パナマの日本人経営旅行社の全面的な協力とベネズエラ進出企業や大使館の方からの助言をたくさんいただいたお陰で、安全面で全く心配がない有意義な修学旅行となった。



4 カラカスの治安と生活

カラカスの概要の項で、「窃盗、強盗、殺人事件、交通事故などは頻繁に起きている。銃による事件も多い。」と記載したが、実際の生活の中でどんなことが起きているのかを記載する。

居住区から日本人学校までの通勤には自家用車を使っているが、車強盗や短期誘拐等の被害に遭わないよう、可能な限り通勤コースや時刻を固定しないようにしている。実際、私の派遣期間にも日本人が短期誘拐やピストル強盗の被害を受けたこともあった。また、外出時には、強盗に遭ったときにいつでも差し出せるように「命金」をポケットに忍ばせていた。駐車場に車をとめるときも、できるだけ明るく、人通りの多い場所を見つけるようにしている。強盗の被害に遭わないためである。

企業によっては徒歩での外出を禁止しているところもあった。通勤時、街中を歩いていて強盗に遭った邦人もいた。街中を歩くときには、時々うしろを振り返り、警戒しているところをどこにいるか分からない強盗に見せるようにしていた。もちろん、夕方以降の外出は、それなりの覚悟が必要だった。

3年間のカラカスでの生活を終えて、治安関係で一番大変だったのは帰国間近の2月、青年の日の集会を契機に反政府運動が大きくなり、政府側との衝突で何人もの尊い命が奪われる出来事があり、道路封鎖やデモ行進などにより日本人学校も臨時休校や午前授業での打ち切り、そして、とうとう学校での授業が行えなくなり、派遣教員が児童生徒宅を訪問して指導する「プランB」を行ったことだ。5人の児童生徒に対して5名の派遣教員。1対1の授業が児童生徒宅で展開された。結局、卒業式や修了式も学校では行えず、場所を借りて実施した。ベネズエラではプランZまで必要だとも言われるが、日本でもプランB、C位は必要だと感じている。

カラカスでは治安上、派遣教員家族もかなり窮屈な生活を強いられて、ストレスも溜まるため、長期休業中はカラカスを離れ、リフレッシュにあてるよう先生方を指導し、私自身も率先してそのように努めた。

5 おわりに

カラカス日本人学校での3年間の勤務を終え、校長として何が大事だったか振り返ったとき、それは日本の学校の校長にも共通な事だった。

まず、信頼関係を基盤に置くということである。校長からの指示伝達、説明は明快にし、なぜ校長がそのように考えているのかをしっかりと説明した。派遣教員をはじめ、教職員や従業員が、校長の考えをはっきり理解し、協力してくれれば、学校運営の成果はかなり期待できる。私はそのように考え実践してきた。

また児童生徒の安心安全をしっかりと考えるということである。私の赴任前に泥棒に侵入されたフェンスと体育館の錠の修繕、敷地内と校舎の壁にセンサー付防犯灯の設置、水道管移設工事、遊具のペンキ塗り、児童生徒用トイレの改修、窓の戸車の交換、蛍光灯落下予防線措置、グラウンド物置にかんぬき設置、電気配線の見直し措置、南側フェンスの強化、雨樋の交換、ギャラリー階段の修繕、バスケットボード交換、浄化槽設備の修繕等、安全で快適な学校生活となるためにできることは全てやった。

カラカス日本人学校では、全国から集まった優秀な教員が児童生徒一人一人に応じた教育を展開できた。「実態を捉え、個に応じた教育を提供する。」という当たり前のことが当たり前に、組織として実践できた。保護者や理事会、日系人会などの惜しめない協力もありがたかった。理事の方の「日本人学校に通っている子どもたちを、ここに住んでいる日本人が支えられないでどうする」という気概のある声も聞かれた。

ベネズエラは治安の悪い国である。治安は悪いが良いところもたくさんある国である。2年目からの職員研修では、この国の良さを教員自身が理解するような取り組みをした。教員がこの国を好きになり、子どもたちにそれを伝えることができなにか考えた。派遣教員の任期は短く、せつかく海外の日本人学校に派遣されて来たのだから、校内研修も日本と同じ内容や手法ではなく、海外ならではのものをと望んできた。日本人学校では、児童生徒も先生方も日本と違った文化・風習の中で暮している。良いことも悪いことも、日本と同じことも違ったことも、全部ひっくるめて、まずは受け入れ、理解を試み、その上で判断し、行動していく。そんな中できつと国際性の幹の部分が身についていくのだろうと思う。しかし、このことは簡単にできるわけではなく、相当な努力と葛藤を必要とする。私自身、まだまだそうはならず、それこそ修養がまだまだ不足しているのだと感じている。

特色ある教育活動の項で記載したように、3年目にはそれまでイベント的だったマリア校との交流を改善し、回数も多くした。そのことで、子どもたちがこの国の子どもをより理解し、好きになったのではないと思う。

最後に治安が年々悪化し窮屈な生活環境ではあったが、児童生徒のために何ができるか知恵を絞り、汗を流して職務に励んでくれた派遣教員と現地スタッフ、私たちの活動を全面的に支えてくれた保護者はもとより、大使館や理事会、二水会、日系人会の方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

カラカス日本人学校に児童生徒として、あるいは教職員として席を置いた、たくさんの方々の今後の活躍とカラカス日本人学校の発展を願わずにはいられない。